

## ああ ひめゆりの乙女たち（一）

沖縄戦の世界史的惨劇は「ひめゆりの塔」に凝集されると言われている。「ひめゆり」とは沖縄女子師範と県立一高女生全員が誇らかに胸にした共通の校章。相思樹そうしじゆ並木に続く校門を一つにする姉妹校だった。この六月末、惨劇の乙女たちの御霊を祈念して「ひめゆり平和祈念資料館」がやっと開館した。準備のために実に四十余年がたっている。

開館を期に、「ひめゆりの塔」の壕や全島で散った二百十九人のひめゆりの娘こらの悲しい『墓碑銘』が納められた。銘主文は十行以内に凝縮されているが、「戦場でのようすは全く不明」と半行のみもあり、悲しみをさらにさそう。編集者たちは「どうしても最後が分からない。とても残念ですが、これが戦争だと思えます」。ずっしり胸に響く。

一高女の九十三人の部からごく一部をここに抜粋。礼深くして。

玉城武子（一年・十三歳）——「米軍上陸後安里の壕に避難していたが、五月二十日

母が重傷を負った。母のために薬を探しに行こうとする武子を必死に止めたが、壕を出ていった。その直後砲弾を受け即死した」

板良敷良子（四年・十六歳）——「六月二十一日荒崎海岸で米軍自動小銃の乱射により学友三人が射殺された際、教師学友九名と共に榴弾で集団自決。…自決を決めた二十日の晩、「お母さんにもう一度会いたい」と泣き、「弾の落ちない空の下をもう一度大手を振って歩きたい」と話していた」

牧志鶴子（四年・十六歳）——「六月十七日夕方、至近弾で大腿部に重傷を負い、足がない…お母さん！」と泣き叫んでいたが、学友の見守るなか息を引きとった」

そのころ、ひめゆり出身の私の姉光子もアメリカ軍に追いつめられ、夫と手をつないで摩文仁の崖から投身したらしい。

（一九八九年七月二十八日）